

中学校 英語

英語科の「書くこと」の領域において、
基本的な語彙や文構造を活用する力を高める指導法の研究
—帯活動を通して—

五所川原市立五所川原第三中学校 教諭 入間川 梢

要 旨

本研究は、「書くこと」の領域において、基本的な語彙や文構造を定着させ、活用する力を高める指導の在り方を探ったものである。帯活動として、既習事項の復習とそれを土台にして文を創作する活動を取り入れた授業実践が効果的であるか検証した。その結果、生徒が正しく書くことのできた単語や文が増加し、さらに、教科書本文の表現以外にも自分で創作して文を書く割合が高まった。

キーワード：中学校 英語 書くこと 帯活動 ストーリーライティング

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成20年3月）では、言語活動の「エ 書くこと」の領域において、「(ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること」の指導事項が示されている。これは、聞いたり読んだりすることの内容理解から「書くこと」の育成が更に必要とされていることを述べたものである。

私自身の指導を振り返ってみると、日々の授業においては、教科書を使用することに多くの時間を費やしている。教科書を使用して授業を行う際には、本文和訳や英問英答のような内容理解にとどまり、学習したことを活用する力を高めるような指導を余りしてこなかったという反省点が挙げられる。活用する力を高めるためには、これまでの授業に加え、教科書の題材を生かして書く力を伸ばす指導が必要だと感じている。

そこで、本研究では教科書で学習した基本的な語彙や文構造を「書くこと」につなげ、活用する力を高める指導法として、帯活動の中で既習事項の復習と、それを土台にして文を創作する活動を取り入れた授業実践が有効であると考え、本主題を設定した。

II 研究目標

「書くこと」の領域において、帯活動の在り方を工夫・改善することにより、基本的な語彙や文構造を活用する力を高められることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

「書くこと」の領域において、帯活動として既習事項の復習を行ってから、それを土台にして文を創作する活動を行うことにより、基本的な語彙や文構造を活用する力を高めることができるであろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

(1) 基本的な語彙や文構造の定着

基本的な語彙や文構造を活用する力を高めるためには、まず基礎基本となる語彙や文構造を正しく身に付けることが必要不可欠である。本研究では、教材として教科書を使用して活動することから、教科書で扱う語彙や文構造を「基本的な語彙や文構造」と捉える。それを定着させるためには、語彙や文構造を繰

り返し復習し、定着を図る手立てが必要である。一つの単元の学習が終わった後も繰り返し基本的な語彙や文構造に触れることができるように、指導過程を工夫する。

(2) 基本的な語彙や文構造の活用

英語科では、言語活動の考え方として、基礎的・基本的な内容についての指導を十分に行うとともに、それらを活用して意思の伝達を行う言語活動を重視している。学習指導要領では、言語活動の取扱いについて、「(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること」と示され、「言語の使用場面の例」が挙げられている。教科書にはこれらの言語の使用場面が簡単なものから難しいものへと段階的に配置されているため、言語活動に生かすことは効果的であると期待できる。

言語活動を行う際にはアウトプットする活動が重要である。村野井は、教科書を使った内容中心の授業として「(1) 提示, (2) 理解, (3) 練習, (4) 産出」の手順を提示し、その中の核となる活動として産出を挙げている。「産出」とは、「意味ある題材内容について理解した後に、題材内容を自分の英語で再生・要約したり、題材内容について考えたことを学習した事柄を応用して表現したりすることが、主な活動となる」(村野井, 2006)と述べている。村野井は、英語習得のためにアウトプットする活動が必要不可欠であることを主張している。

本研究では、この産出に当たる活動として、ストーリーリテリングとストーリーライティングを取り入れた指導過程の工夫を行うことで、基本的な語彙や文構造を活用する力を高めたい。

2 研究内容

(1) 単元における帯活動の指導過程の工夫

学習者にとって、新たに学習した語彙や文構造を一時間の授業の中ですぐに活用することは難しいことである。その場では活用することができたとしても、そのまま定着させることは難しいだろう。また、新しい単語や文法を次々と学ぶにつれて、それ以前に学習したことを忘れてしまうこともある。

そこで、語彙や文構造を繰り返し復習し、定着を図るための帯活動を学習過程の中に組み入れることが有効であると考えた。

図1のように、単元における帯活動を三つの時期に分類し、それぞれの時期に次のような活動を取り入れるように指導過程を工夫した。

- ・導入期→教科書本文の内容理解を中心とした学習を行う。
- ・定着期→帯活動として、単語・新出の文構造の音読練習、教科書本文の音読、ディクテーションを行う。
- ・創作期→帯活動として、ストーリーリテリング、ストーリーライティングやテーマを与えての自由英作文を行う。

(2) 帯活動の工夫

帯活動について太田は、「ある一定の期間、授業の一定の時間帯(例、授業の最初の5分間)に行う活動」と定義している(太田洋, 2012)。また、本多は、「「触れさせ、慣れさせ、使わせて」のための活動の場である」と述べている(本多敏幸, 2012)。本研究においては、授業の最初の5~15分程度で、基本的な語彙や文構造を継続的に復習するための帯活動と、それを土台にして文を創作する帯活動の二つのパターンの活動を順に行うことにした。

ア 基本的な語彙や文構造を継続的に復習する帯活動

基本的な語彙や文構造を正しく身に付けさせるため、教科書の題材を1回の授業の中だけで扱うのではなく、単語と新出の文構造練習、音読練習、ディクテーションの中で扱い復習する指導過程を考えた。

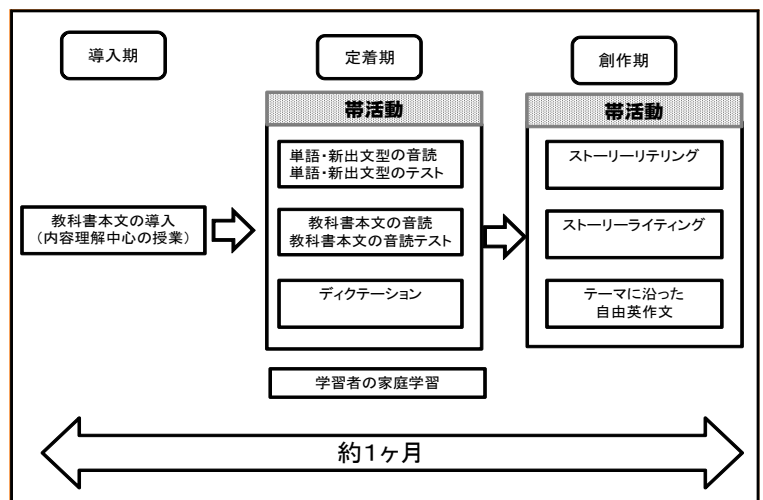


図1 単元における帯活動の指導過程

(ア) 単語と新出の文構造の音読練習と書き取りテスト

基礎基本となる単語と新出の文構造の定着を促すために、図2のハンドアウトを用いて音読練習を行った。教師の後に続いて音読する活動、ペアで問題を出し合う活動、暗記して口頭テストをする活動を、授業の中で2分程度ずつ行い、更にそれを家庭学習にして書く練習をさせた。次の授業では小テストを実施し、定着を図った。



図2 音読練習のハンドアウト例（単語と新出の文構造）

(イ) 教科書本文の音読練習と音読テスト

教科書本文を利用して単語や文法を定着させ、まとまった文章の理解を促すために、図3のハンドアウトを用いて音読練習を行った。教師の後に続いて音読する活動、ペア音読、個人音読、穴埋め音読、和文から英文にする練習の中から生徒の実態に合わせて活動を選択し、帯单元の中で5分程度ずつ行った。その後、個人の音読テストを実施した。

(ウ) ディクテーション

教科書本文の音読練習で強化した「音声」と単語や新出の文構造を書くことで強化した「文字」を結び付けるために、音読テストが終了した次の時間に、教科書本文のディクテーション（教師が読んで英文又はCDで再生された英文を聞いて書き取る活動）を行った。教科書を見て訂正させ、家庭学習で間違った英文を復習させた。

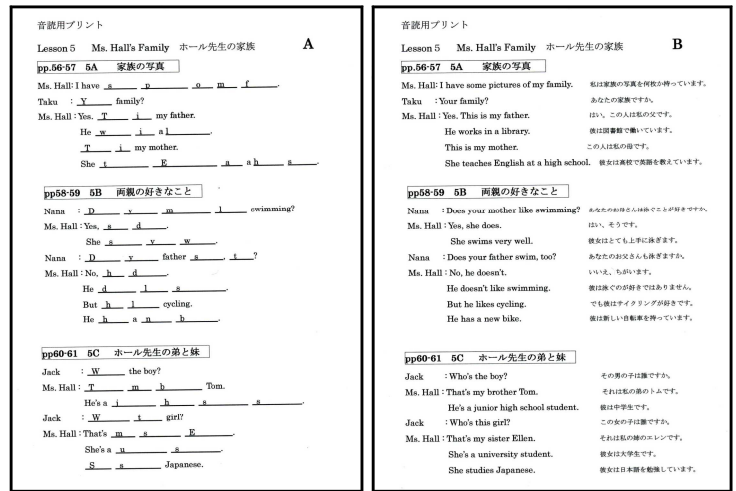


図3 音読練習のハンドアウト例（教科書本文）

イ 文を創作する帯活動

中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年9月）では言語材料の取扱いについて、「文法事項を指導する際には、その意味や機能を十分に理解させた上で、それまでに学んだ語彙や文法事項と関連を図り、言語活動の中で自分の考えや気持ち、事実などを伝え合うことに生かすことが大切である」と示している。このことから、ストーリーリテリングとストーリーライティングが基本的な語彙や文構造を活用する力を高めるために有効であると考えた。

(ア) ストーリーリテリング

単語と新出の文構造の音読練習や教科書本文の音読練習で培った表現や既習事項を土台として、表現しようとすることを個々の生徒が考え、文を創作する活動としてストーリーリテリングを行った。教科書の内容を表すピクチャーカードを黒板に掲示し、絵を説明する英文を考えて一人一文ずつ発表させた（図4）。教科書の本文にある英文でもよいし、既習表現を使って文を創作してもよいこととし、間違った表現には教師が正しい文を言い直すフィードバックを与えた。



図4 ストーリーリテリング活動時の黒板の様子

(イ) ストーリーライティング

ストーリーリテリングの活動時に音声で表現したことを「書くこと」につなげる活動として、ストーリーライティングを行った。ストーリーライティングのハンドアウト（図5）では、①オーラルイントロダクションやストーリーリテリングで、生徒たちが既に目にしたことのある絵を視覚補助として用いる、②教科書の暗記にとどまらず、表現しようとすることを個々の生徒が自ら考え、創作しやすくするため、教科書に出てくる絵の配置を入れかえて父→母→兄弟の順に並べる、という工夫をした。活動の際には教科書本文と文の順番を変えて構成してもよいこと、本文と同じ表現でも違う表現でもどちらでもよいこと、絵に関する内容であれば文や単語を付け加えてもよいこととし、10分間の帯活動の中で書

かせた。

(2) 帯活動の指導計画

生徒に学習内容を確実に定着させるために、表1の指導計画を作成した。

帯活動では、その単元の学習内容ではなく、前の単元の学習内容を取り扱うことにした。これにより、二つの単元を通して同じ学習内容に繰り返し触れることができる。

また、帯活動の内容は①単語から文へ、文から文章へと段階的に学習できるようにすること、②「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能をバランスよく学習できるようにすること、に配慮した。

3 検証

(1) 教科書の読解活動直後と音読テスト後におけるディクテーションの比較

基本的な語彙や文構造の定着を確かめるため、教科書の読解活動直後と音読テスト後におけるディクテーションについて検証を行った。ディクテーションにおいて正しく書くことができた英文数と単語数を一覧表にまとめて、t-検定を行った。その結果、英文数については、 $(t=8.30, p<.01)$ となり有意な差が認められた。また、語数についても $(t=3.9, p<.01)$ となり有意な差が認められた。このことから、単語と新出の文構造練習及び教科書本文の音読練習を行う帯活動によって、基本的な語彙や文構造が定着し、書く力が高まったと考えられる。

(2) ストーリーライティングのワークシートの分析

基本的な語彙や文構造を活用する力の高まりを確かめるために、帯活動として単語と新出の文構造の音読、教科書本文の音読、ディクテーション、ストーリーライティングを行ったクラス（3クラス89名）と、単語と新出の文構造の音読、教科書本文の音読のみを行ったクラス（2クラス53名）のワークシートを分析した。

ア 書かれた英文数と語数の比較

表2は、ストーリーライティングで書かれた英文数と語数を比較したものである。t-検定を行った結果、有意な差が認められた $(t=4.49, p<.01)$ $(t=5.7, p<.01)$ 。これは、ディクテーションを行うことによって書くことを意識して音読活動に取り組むようになったこと、自分で書くことができない単語や英文に気が付き、直す作業を通して単語や英文が定着されたことが要因として考えられる。

表1 帯活動の指導計画

月	時間目	帯活動(5~15分)	本時の指導内容(35~45分)	家庭学習の変化
10月	1	Lesson6 単語・新出文型練習	Lesson6 音読練習	Lesson6
	2		Lesson6 新出文型導入 内容理解	単語・音読
	3		Action	
	4		Action	
	5		Lesson6 基本文型導入 内容理解	
	6			
	7			
	8	Lesson6 音読テスト(個別)		本文を書く 練習
	9	Lesson6 ディクテーション		
	10	Lesson6 単語・新出文型練習	Lesson6 音読練習	Lesson6
	11			単語・音読
	12			
	13			
	14		Talking Time	
	15		Chapter Project	
11月	16		Chapter Project	
	17	Lesson6 ストーリーライティング	Reading1	本文を書く 練習
	18	Lesson6 ストーリーライティング	Lesson7 新出文型導入 本文内容理解	Lesson5
	19	Lesson6 ストーリーライティング		
	20	Lesson6 音読テスト(個別)		
	21	Lesson6 ディクテーション		
	22	Lesson7 単語・新出文型練習	Lesson7 音読練習	Lesson7
	23			単語・音読
	24			
	25			
	26		Action	
	27		Action	
	28		季節と月	
	29	Lesson6 ストーリーライティング	月日の言い方	本文を書く 練習
12月	30	Lesson6 ストーリーライティング	Lesson8 新出文型導入 本文内容理解	Lesson6
	31	Lesson6 ストーリーライティング		

表2 ストーリーライティングの英文数と語数の比較

	英文数平均	語数平均
単語・新出文型の音読・本文音読・ディクテーション・ストーリーライティングの帯活動を行ったクラス(3クラス 88名)	11.7	54.6
単語・新出文型の音読・本文音読の帯活動を行ったクラス(2クラス 53名)	8.1	34.0

イ 書かれた英文の内容の分析

ストーリーライティングで書かれた英文を、①教科書本文と同じ表現の文、②教科書本文の表現を変化させた文、③教科書本文以外の表現を使って創作した文、の三つに分類して全体の文に占める割合を比較した(表3)。

表3 ストーリーライティングにおいて分類された英文が全体に占める割合

	①教科書本文と同じ英文の割合	②教科書本文を変化させた文の割合	③教科書以外の表現で創作した文の割合
単語と新出文型の音読・本文音読・ディクテーション・ストーリーライティングの帯活動を行ったクラス(3クラス 88名)	37.5%	19.0%	12.4%
単語と新出文型の音読・本文音読の帯活動を行ったクラス(2クラス 53名)	38.2%	13.4%	6.4%

教科書本文の表現と同じ文の割合はほぼ同じであったが、教科書本文の表現を変化させた文や教科書本文以外の表現を使って自分で創作した文の割合は、帯活動としてディクテーションやストーリーライティングを行ったクラスの方が高かった。これは、前時に行ったストーリーライティングによって、他の生徒が考えた文の発表を聞くことにより、発想が豊かになって表現の幅が広がったからと考えられる。

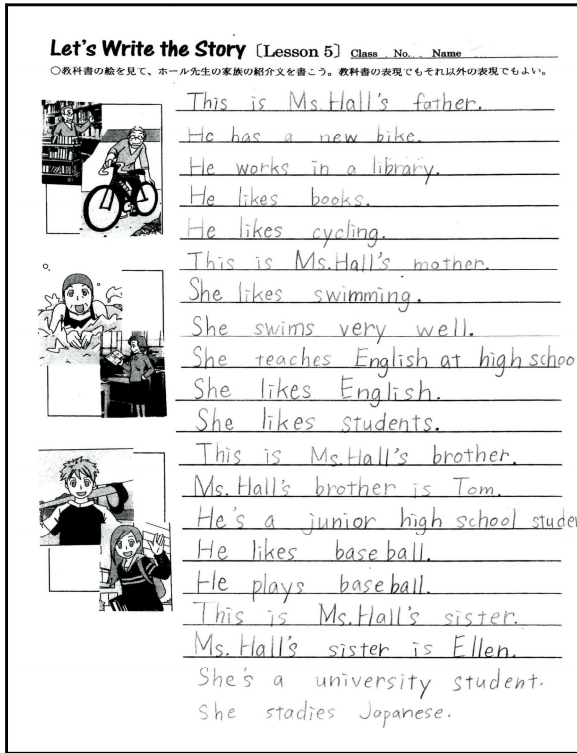


図5 ストーリーライティングの作品例

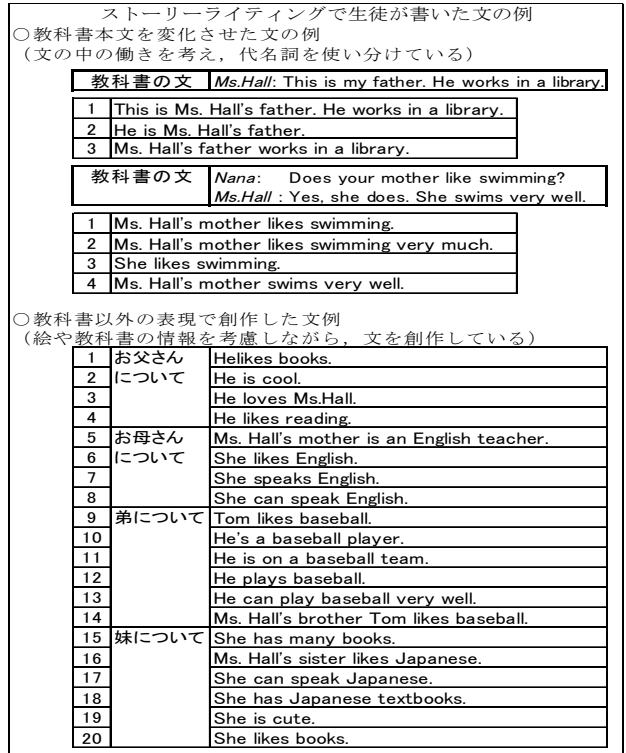


図6 ストーリーライティングの文例

(3) 事前・事後の意識調査

本研究の検証授業の19時間目の帯活動として、Lesson 5「ホール先生の家族」(Total English 1, 学校図書)のストーリーライティング(「ホール先生の家族の紹介文を書こう」)を行った。この活動に対する生徒の意識を、検証授業の前後に調査し、その結果を比較した(図7)。

ホール先生の家族の紹介文を書くことについて、「できる」「どちらかといえばできる」という肯定的な意識をもっていた生徒は検証授業前は25人しかいなかった。それが、検証授業後には63人と大幅に増加している。

これは検証授業前には難しい活動だと思っていた生徒が、帯活動の工夫によって、その活動をできるようになったという実感できたためと考えられる。帯活動は、

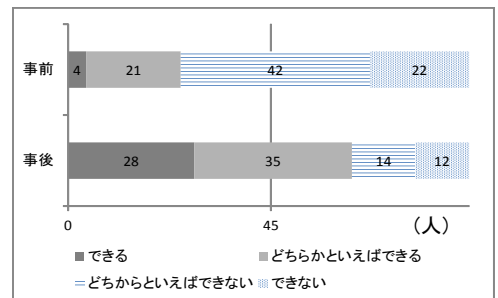


図7 ホール先生の紹介文を書くこと

生徒の「できる」という達成感を高めることにつながったのではないか。

V 研究のまとめ

帯活動として既習事項の復習を行った結果、ディクテーションにおいて復習後の方が正しく書かれた英文と語彙が増加した。このことから、短い時間でも繰り返し同じ単語や文を目にし、音声と文字を結び付けて段階的に学習していくことによって定着が図られたと考えられる。

さらに、ストーリーリテリング、ストーリーライティングといったアウトプットを重視した活動を行った結果、それらを行っていないクラスよりも多くの単語や文を書くことができ、その内容についても教科書で暗記した表現だけではなく、自分で創作した文の数が増えた。このことから、基本的な語彙や文構造を活用する力が高まったと考えられる。

VI 本研究における課題

帯活動は短時間の活動であり、定着を図るために十分とは言えない。そこで、生徒の家庭学習は不可欠であると考え。帯活動で用いたハンドアウトや小テストと併せた効率のよい家庭学習の方法を、今後検討していく必要がある。また、ストーリーライティングにおいて、書かれた英文を効果的にフィードバックすることができなかった。そのため、生徒が書いた作品をお互いに読み合う活動といった方法を検討していく必要がある。

<引用文献>

- 1 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領（平成20年3月告示）』, pp. 106-107
- 2 村野井仁 2006 『第二言語習得研究からみた効果的な英語指導法・学習法』, p. 22, 大修館書店
- 3 太田洋 2012 「帯活動の意味 Teaching≠learningだからこそ」『英語教育 vol. 61 No. 2』, p. 10, 大修館書店
- 4 本多敏幸 2012 「長いスパンで帯活動をプランニングする」『英語教育 vol. 61 No. 2』, p. 13, 大修館書店
- 5 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編（平成20年9月）』, pp. 17-18, p. 45

<参考文献>

- 太田洋 2007 『英語を教える50のポイント—Tips of English Teachers—』 光村図書
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 共著 2010 『詳説 第二言語習得研修—理論から研究法まで—』 研究社
- 村野井仁 2009 「インプットとアウトプットをつなぐ教科書中心の授業—教室SLA 研究からの示唆」『英語教育 vol. 50 No. 12』, pp. 31-33, 大修館書店